

非実在 ~Airmys~ 探偵小説研究会

エアミステリ

拾捌
號



エアミステリ研究会

非実在探偵小説研究会18号 目次

企画

企画 お題競作 作中作ミステリ

虚構の中の殺人

空を飛ぶために必要な動機

小窓の奥の微笑みの

その他

平成ミステリベストアンケート結果発表

つかまえてシリーズ全作レビュー 前編

麻里邑圭人……………6

神崎蒼夜……………44

根倉野蜜柑……………70

松井和翠……………83

ないところ……………95

表紙・扉ページ ウスダアヤ



企画 お題競作 作中作ミステリ

今回のお題競作企画は「作中作ミステリー」です。

作品の中に『作品』が存在するという、物語が入れ子構造となるこの形式。ミステリとしての謎と仕掛けを一体どこに仕込んでくるのか、作者の腕と遊び心が試されます。

この企画に3名が挑戦しました。それぞれ『作中作』モノのあの利点、この特徴…と違ったところを活用した3作品となりました。それでは、どうぞお楽しみ下さい。

虚構の中の殺人

麻里邑主人

0

事件発生から約一ヶ月が経過した八月二十四日の土曜日。

今は亡き叔父の家の書斎——事件が起きた正にその現場に集められた三人の編集者の顔をぐるりと見回すと、ボクはピリピリとした空気を感じながら、お馴染みのあの言葉を口にした。

「……犯人は这里面にいます」

古今東西の推理小説で何度となく使われてきた、解決編の始まりを告げる名探偵の決め台詞……そう。ボク——麻里邑主人はこれから敬愛する叔父を殺害した、冷酷非道な犯人の名前を指摘しようとしていた。犯人は現場を偽装することに於て自身に繋がる痕跡は全て消したと思っっているようだが、それはとんだ間違いだ。むしろ現場には偽装工作をしたことよって、その人物が犯人であるという決

して逃れられない証拠がはつきりと残されていた。

室内の空気が、ボクの宣言を受けてますますぴんと張り詰める。遂にはそれに耐えかねたように三人の編集者の紅一点——喜多村萌梨が十代でも通用する愛らしい顔を恐怖と不安に引き攣らせて、ヒステリックに叫んだ。

「この中に犯人がいることくらい、前から分かってることじゃないですか！ いいかげん勿体ぶるのはやめて下さい！」

「私も喜多村女史に同感ですね」

と、彼女の隣で仏頂面を浮かべていた青山繪吾が苛立ちを滲ませた声で言った。あおやまりんご

「正直私も今の状況——痛くもない腹を探られるのにはうんざりしているのです。だからこれ以上焦らすような発言は慎んでもらえますかね」

「……」

ボクはちらりともう一人の編集者——鳥井直人の反応をとりいなおと

窺^{うかが}った。少し離れた所で腕組みして立っている彼は特に何も語らなかつたが、こちらに向けられた批判的な目を見れば、他の二人とほぼ同じ考えなのは明らかだつた。

「……皆さんの意見は分かりました」

ボクは頷くと、厳かな口調で言つた。

「ではできる限り簡潔明瞭にご説明致しますしょう。ボクの愛すべき叔父——推理作家の南野北斗^{みなみのほくと}氏を殺害した犯人が誰なのかを」

*

内側に大きく開け放たれた書齋のドア。その向こう側に広がる光景を見て、咄^{とつさ}嗟に何が起こつているのか理解できなかつた。言い換えれば、それくらい目の前にある光景は現実感を欠いていたのだ。だが少しずつ、何が起こつているのか認識できるようになつていくにつれ、今度は雷撃のような驚愕に全身を貫かれ、呆然と立ち尽くすことになる。書齋のドアの向こう側では、ついさつきまでにこやかに談笑していた影崎由良^{かげさきゆら}が右胸を下にして横たわつていた。彼の倒れている周囲には机から落ちたのだろう、ゲラと思われる紙の束が散らばつてゐる。影崎が完全に事切れてい

るのは左胸に広がる真つ赤な染みと大きく見開かれたまま動かない人形のような瞳を見れば一目瞭然だつた。

今をときめく人気推理作家の突然死。しかもそれが殺人とあつては驚くなどというのが無理な話だろう。だが、それ以上に僕の目を引き付けたのは、ゲラの上に投げ出された影崎の右手だつた。よく見れば影崎の右手は人差し指だけが血で赤く染まつており、その近くに散乱しているゲラの一部に、幾つも赤ペンでチェックした跡に混じつて一際赤い歪な丸印が付けられている。

推理作家は死に際に何を遺そうとしたのか。僕は歪な赤い丸で囲まれている文字を見た。

麻里邑圭人

「……ほう、これは興味深い」

由比藤^{ゆいとう}もまた、それを視界に認めたのだろう。僕のすぐ後ろで殺人現場での発言とは思えない、実に愉快そうな声^{こゑ}が上がる。

「麻里邑圭人——まさか推理作家が死に際に遺したメッセー^{メッセージ}ジが、自身が創造した名探偵の名前とはね」

思えば叔父——穂浪元邦ほなみもとくにはいつもボクのことを気にかけてくれた。

もともと叔父が子供好きで面倒見のいい性格だったからというのも勿論もちろんあるだろうが、それ以上にボクが推理小説ミステリーというものに小学生の時から関心を示していたのが一番理由としては大きいのではないだろうか。

きっかけは忘れもしない小学校四年生の夏。市の図書館へ読書感想文の課題図書を探しに来た際、何気なく手に取った赤川次郎の『三毛猫ホームズの怪談』だった。今となつては何でそれを手に取ろうと思つたのか理由はおぼろげだが、恐らく当時小学生の間で学校の七不思議のような学校の怪談が流行つていたのと「三毛猫ホームズ」という可愛らしいタイトルのアンバランスさが何となく気になつたのではないかと思つている。あとでそれがシリーズの三作目であることを知つたが、その時は全く気にもしていなかつた。というか、そんなことを気にする前にすっかり物語に引き込まれていった方が正しい。『三毛猫ホームズの怪談』を文字通り一気読みしたボクは、まだ興奮の熱が冷めやらぬうちに続いて三毛猫ホームズシリーズを一作

目から順番に読み進めていった。そうして一通りシリーズを読み終わると今度は子供向けに書かれた原典であるシャーロック・ホームズシリーズへ……といった具合に、順調に推理小説の世界にどっぷりハマつていったのだった。そして多分叔父の目からすると、そんなボクの姿は実に微笑ましかつたに違いない。

その叔父が実は南野北斗というペンネームで推理小説を書いていることを母から教えられたのは、ボクが子供向けのシャーロック・ホームズシリーズを全作読み終わろうかという時だった。

（あの叔父が推理作家だった……！！）

その事実を知つた時のボクの心境は驚きよりもむしろ大好きな叔父がより身近に感じられる嬉しさの方が勝つていたように思う。早速ボクは地元の本屋に行くと文庫の棚に並んでいた叔父の作品——確か『青い屋敷の惨劇』というタイトルだった——を買つて読んでみた。大人向けに書かれた叔父の推理小説は、当然のことながら小学生には難しい漢字や表現が多く使われていてなかなか読むのが大変だったが、苦勞して読み終わった時の感動はこれまで読んできた作品群と比べても決して引けを取らないものだった。こんな面白いものを書ける叔父はやっぱり凄い。ボクは改

めて叔父を尊敬した。そして同時にボクは読むだけではなく自分で推理小説を書いてみたいと思うようになった（後にボクは南野北斗【MINAMINOHO-KUJO】が穂浪元邦【HONAMI MOTOKUNI】のアナグラムであることを知った。思い返してみれば叔父の作品はアナグラムを使ったネタが多いような気がする）。

それから十五年後、ボクは某有名推理作家の名前が冠された長編ミステリの新人賞に五百枚ほどの名探偵をテーマにした連作ミステリを投げ、見事第一席を射止めた。受賞の連絡を受けたのは勤務先の昼休憩の時だった。いてもたってもいられなくなって真つ先に叔父へ電話をすると、叔父は我がことのように喜んでくれた。「これって夢じゃないよね……？」としきりに呟くボクに、叔父は笑いながら「とりあえず本になったものでも見れば嫌でも実感が湧いてくるさ」と自身の経験談を語ってくれた。事実、ボクがようやく推理作家になったという実感が得られたのは自宅に送られてきた受賞作の見本誌を手にとってからだだった。

（これでボクも叔父と同じ推理作家になったんだ）
そう思うと、何だか凄く誇らしい気がした。

ただその一方で、ちょっとしたアクシデントもあった。あるうことかボクの記念すべきデビュー作に信じられない

ような誤植があったのだ。ひどく恐縮した様子の担当編集者からそのことを告げられた瞬間、何でそんなことに——と呆然となったが、今思い返してみると受賞式での挨拶や雑誌のインタビューで好きな推理小説の探偵の話をしたのが良くなかったのかもしれない。とりあえず叔父には献本する前に誤植のことを報告しておこうと思い、申し訳ない気持ちいっぱい電話をすると、叔父は「気にすることはないさ」と前回と同じく笑いながら言った。

「むしろ今後作家として続けていくつもりなら自己紹介の時のいい持ちネタができたと思えばいい。だから安心して送ってきてほしい」

それを聞いて、ボクは胸に熱いものが込み上げてくるのを感じた。

……その時はまさか、一ヶ月後に叔父が何者かに殺害されることになるとは夢にも思わなかった。

続きは非実在探偵小説研究会
18号本誌でお楽しみください。



非実在探偵小説研究会～Airmys～18号

発行日 2019年11月24日
発行 エアミステリ研究会
連絡先 airmysdj@gmail.com
<http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>
価格 600円
印刷所 株式会社ポプルス

Special Thanks

編集作業をお手伝いして下さったエアミス研有志メンバー

©2019 エアミステリ研究会 作品の著作権は各著作者に帰属しています